

第十章 論理学

論理学は、思考の法則とか形式について研究する学問です。人間は、心身の二重体であり、心と身体は一定の形式や法則に支配されながら生きています。身体は生理作用によって健康を維持していますが、生理作用は一定の形式や法則の支配のもとで持続しています。例えば、血液は全身を循環しながら養分と酸素を末端の細胞や組織に供給しています。それは、血液が「循環の形式」を通じて養分と酸素を全身に供給することを意味しています。

人体の知覚や運動は、求心神経や遠心神経を通じて神経の信号が伝達されることによってなされます。これは知覚や運動が、神経における「信号伝達」の形式によってなされることを意味します。

また人体の血液では、常に酸素の触媒作用によって化学反応が起きていますが、この反応は一定の法則のもとに行われます。また血管内の血液の流れは、流体の法則のもとに行われています。

それと同様に、心の思考方式も一定の形式や法則のもとに行われています。人間の思考だけは、法則や形式にとらわれることなく、思いのままにできると考えやすいのですが、そうではありません。

アリストテレス(形式論理学の創始者)以後、形式論理学は、様々な思考がもっているところの、共通な法則や形式だけを扱ってきましたが、それに対してヘーゲルやマルクスの論理学(弁証法)は、思考だけではなく自然の発展過程における法則と形式をも扱ってきたのです。

本章において、まず従来の論理学、中でも特に形式論理学とヘーゲル論理学の要点を紹介します。続いて、統一原理に基づいた統一論理学を紹介したのちに、統一論理学の立場から従来の論理学を検討します。

一 従来の論理学

本項目において、主として形式論理学、ヘーゲル論理学、マルクス主義論理学、記号論理学、先験的論理学を扱います。そのうち形式論理学は統一論理学と関係が深いために比較的十分な説明を加えますが、その他は簡単に要点のみを紹介します。その理由は、認識論の場合と同様に、ただ従来の論理学が抱えている問題点も統一論理学が解決しようということを示すために、その問題点に関する部分だけを紹介するためです。

ところでその中で、ヘーゲル論理学を比較的詳しく扱ったように見えるのは、統一論理学から見ると、ヘーゲル論理学全体に問題が多いために、その問題の要点を扱ったところ、長くなっただけなのです。したがって、統一論理学それ自体を理解するには、本項目は省略してもいいのです。

(一) 形式論理学

形式論理学は、アリストテレスによって立てられた論理学として、純粋な思考(判断や推理)の形式や法則のみを研究する学問であり、判断や推理の対象(内容)は一切取り扱っていません。カントは、「ところで論理学が、かかる確実な道をずっと古い時代から歩んできたことは、この学がアリストテレス以来、いさかも後退する必要がなかったところから見て明白である。……更に論理学について奇異なことは、この学が今日に至るまでいさかも進歩を遂げ得ず、従って打ち見たところそれ自体としてはすでに自己完了している観があるという事実である」(『純粋理性批判』第2版序文)といっています。形式論理学はアリストテレス以来、約二千年間、ほとんど変更なく継続してきたものです。それは、この論理学が思考に関する限り、それなりの客観的な真理を含んでいるからです。統一論理学を紹介するにあたって、まず形式論理学を紹介するのは、この論理学のどの部分が真理であるかを明らかにすると同時に、不十分な点も指摘するためです。それでは、形式論理学の要点を紹介します。

(1) 思考の原理

形式論理学は思考の法則として、次の四つの原理を挙げています。

- ①同一律(law of identity)
- ②矛盾律(law of contradiction)
- ③排中律(law of excluded middle)
- ④充足理由律(law of sufficient reason)

同一律は、「AはAである」という形式で表現されます。例えば「花は花である」というのがそれです。これは現象の変化にもかかわらず、花であるという事実それ自体は不変であるということの意味しています。また思考そのものの一致性をも意味します。すなわち「花」という概念は、いかなる場合にも、同一の意味を有しているということなのです。さらに「鳥は動物である」というように、二つの概念(鳥と動物)が一致していることをも意味する場合もあります。

矛盾律は「Aは非Aではない」という形式で表されますが、これは同一律を裏返したものです。「これは非花ではない」というのは「これは花である」というのと同じ意味であり、「鳥は非動物ではない」というのも「鳥は動物である」というのと同じです。一方は肯定的な表現であり、他方は否定的な表現ですが、内容は同じです。

排中律は、「AはBか非Bのいずれかである」と表されます。その意味は、Bと非Bという二つの矛盾する主張の間に、第三の主張はありえないということなのです。

充足理由律は、ライプニッツによって初めて説かれたものですが、「すべての思考は必ずしかるべき理由があって存在する」ということです。これを一般的に言えば、「すべての存在するものはその存在の十分な理由を有する」という因果律になります。ところで、この理由には二つの意味があります。一つは根拠(論拠)を意味し、もう一つは原因を意味します。根拠は帰結に対する相対的な概念であり、原因は結果に対する相対的な概念です。したがってこの法則は、思

考には必ずその論拠があり、存在には必ずその原因があるということを意味するのです。

そのほかにいろいろな法則(原理)がありますが、それあはみな、この四つの根本原理から演繹されてくるものです。形式論理学は、また三つの根本的な要素(思考の三要素)―概念(concept)、判断(judgment)、推理(inference)―から成り立っています。次にそのことについて説明されています。

(2) 概念

概念とは、事物の本質的な特徴をとらえた一般的な表象(または考え)をいいますが、概念には「内包」(intension)と「外延」(extension)という二つの側面があります。内包は各概念に共通な性質をいい、外延はその概念が適用される対象の範囲をいいます。それについて、生物の例を取って説明されています。

生物は、動物、脊椎動物、哺乳類、霊長類、人類のように、いろいろな段階の概念に分類されます。生物の生命のあるものです。動物にはもちろん生命がありますが、その上に感覚器官がありません。脊椎動物には、それに加えて脊椎があります。哺乳類には、それに加えて哺乳をするという性質があります。霊長類は、それに加えて物を握る能力をもっています。人類は、さらに理性があります。そのように、それぞれの概念を代表する各段階の生物は共通の性質をもっていますが、ある概念のそのような共通性のことを概念の内包というのです。

生物には動物と植物があり、動物には軟体動物、節足動物、脊椎動物などがあり、脊椎動物には爬虫類、鳥類、哺乳類などがあり、哺乳類には霊長類とか食肉類などがあり、霊長類にはいろいろなサルと人類がいます。以上、ある概念が適用される範囲について述べました。そのような範囲をその概念の外延と呼びます。

ある二つの概念を比較するとき、外延がより狭く、内包がより広い概念を「種概念」(下位概念)といい、外延がより広く、内包がより狭いものを「類概念」(上位概念)といいます。たとえば脊椎動物と爬虫類、鳥類、哺乳類などの概念を比べれば、前者は類概念であり、後者は種概念です。また動物という概念と軟体動物、節足動物、脊椎動物などの概念を比べれば、前者が類概念で、後者が種概念となります。さらに生物という概念と動物や植物の概念を比べれば、前者が類概念、後者が種概念となります。このような操作を何度も繰り返していくと、それ以上さかのぼれない最高の類概念に至りますが、それを範疇(カテゴリー、Kategorie)といいます。

また先天的に理性に備わっている、経験によらない純粋概念も、やはり範疇と呼ばれています。範疇は学者によって異なっています。なぜかという、それぞれの学者の思想体系において、最も重要な基本的な概念のことを範疇と呼んでいる場合が多いからです。

初めて範疇を定めたのはアリストテレスですが、彼は文法を手掛かりとして、次のような十個の範疇を立てました。

①実体(substance)、②量(quantity)、③質(quality)、④関係(relation)、⑤場所(place)、⑥時間(time)、⑦位置(position)、⑧状態(condition)、⑨能動(action)、⑩被動(passivity)

近世に至り、カントは十二個(四綱十二目)の範疇を立てましたが、それらはカントの十二の判断形式(後述)から導き出したものでした。カントの範疇については、認識論において紹介されています。

(3) 判断

判断とは何か

判断(judgment)とは、ある対象について、あることを主張することですが、それは二つの概念の一致あるいは不一致の区別を断定することをいいます。それを言語で表現したものが命題(proposition)です。

判断は「主語概念」(主辞、主語、subject)、「述語概念」(賓辞、述語、predicate)、および「繫辞」(連結辞、copula)の三要素から成っています。思考の対象となっている事物が主語概念であり、その内容を規定するのが述語概念であり、これらの二つの概念を連結するのが繫辞なのです。一般的に主語概念をS、述語概念をP、繫辞を一で表して、判断はS-Pと定式化されます。

判断の種類

判断の種類としては、カントの十二の判断形式(四綱十二形式)がありますが、それが今日の形式論理学において、そのまま用いられています。カントの十二の判断形式とは、分量、性質、関係、様相の四綱のおおのに三つの判断形式を与えたもので、次のようなものです。

分量(Quantitat)

- ・全称判断(allgemeine Urteil)……すべてのSはPである。
- ・特殊判断(besondere Urteil)……若干のSはPである。
- ・単称判断(einzeln Urteil)……このSはPである。

性質(Qualitat)

- ・肯定判断(bejahende Urteil)……SはPである。
- ・否定判断(verneinende Urteil)……SはPでなり。
- ・無限判断(unendliche Urteil)……Sは非Pである。

関係 (Relation)

- ・定言判断 (kategorische Urteil) …… SはPである。
- ・仮言判断 (hypothetische Urteil) …… AがBならばCはDである。
- ・選言判断 (disjunktive Urteil) …… AはBであるかCである。

様相 (Modalitat)

- ・蓋然判断 (problematische Urteil) …… SはPであろう。
- ・実然判断 (assertorische Urteil) …… SはPである。
- ・必然判断 (apodiktische Urteil) …… SはPでなければならない。

上記のように、カントは四個の分量、性質、関係、様相の綱目において、それぞれ三個の判断形式を立てたのです。私たちは日常生活において、様々な事件や状況に直面します。そしてそれらに対処するためにいろいろな方案を考えます。そうした思考の内容は、人によって千差万別であるのはいうまでもありません。しかし、判断に関する限り、上述の四つの綱目の判断形式に従ってなされているのです。すなわち分量(多いか、少ないか)に関する判断と、性質(……であるか、否か)に関する判断と、概念の相互関係に関する判断と、それから様相(確実性はどうであるか)に関する判断です。

基本的形式

先の判断形式のうち最も基本となるものが定言判断ですが、それに全称と特称の、量に関する判断形式と、肯定と否定の、質に関する判断形式を組み合わせれば、次の四つの判断が得られます。

全称肯定判断……すべてのSはPである(A)

全称否定判断……すべてのSはPでない(E)

特称肯定判断……あるSはPである(I)

特称否定判断……あるSはPでない(O)

ところで先の十二の判断形式の中の選言判断と仮言判断を除けば、残りはすべて定言判断に直すことができます。そこでこの定言判断を質と量の立場から分類すれば、仮言判断、選言判断以外の形式はすべて以上の四つの形式(AEIO)に収斂されるようになります。それでこの四つのAEIO形式を「判断の基本形式」といいます。A、E、I、Oの記号は、ラテン語の affirmo (肯定)と nego (否定)のそれぞれの初めの二つの母音からとったものです。

周延と不周延

定言判断において、その判断が誤謬に陥らないためには、主語と述語の外延の関係が検討されなくてはなりません。ある判断において、概念が対象の全範囲にわたって適用される場合もあれば、一部分に限って適用される場合もあります。概念の適用範囲が外延全体に及ぶ場合、その概念は「周延」または「周延されている」といいます。そして概念の適用範囲が外延の一部だけに及ぶ場合、その概念は「不周延」または「周延されない」といいます。

この周延・不周延は判断において、主概念と賓概念の関係を知るのに重要です。判断にはS(主概念)とP(賓概念)が共に周延してもよい場合がありますが、SとPが共に周延してはならない場合もあり、またSとPのうち一方だけが周延すべき場合もあるからです。

例えば「すべての人間(S)は動物である(P)」において、Sは周延、Pは不周延です。これは「全称肯定判断」(A)の主賓関係です。

「すべての鳥(S)は哺乳動物(P)ではない」という判断においては、主概念と賓概念が共に周延されています。これは、「全称否定判断」(E)の主賓関係です。

「ある花(S)は赤い花(P)である」において、Sは不周延、Pも不周延です。これは特称肯定判断(I)の主賓関係です。

「ある鳥(S)は食肉動物(P)ではない」という判断において、Sの一部(主概念の外延の一部)がP(賓概念)の範囲外にあることを表しています。つまりSは不周延であり、Pは周延しています。これは、特称否定判断(O)の主賓関係です。

以上のAEIOの判断において、主概念と賓概念の周延・不周延の関係はそのまま規則となっており、この規則を離れたらその判断は誤謬に陥ります。例えば「すべての仁者は好山家である」という判断から「すべての好山家は仁者である」という判断を導き出したとしたら、不当周延の虚偽に陥るために、その判断は誤りになります。全称肯定判断においてSは周延、Pは不周延であるにもかかわらず、結論の判断ではSもPも周延されているからです。

(4) 推理

推理 (inference) とは、既知の判断を根拠にして新しい判断を導く思考をいいます。つまり既知の判断を理由にして、「ゆえに……である」という結論 (conclusion) を導き出すことを推理といいます。そのとき、既に知られている判断を「前提」 (premise) といいます。推理において、前提となる判断が一つだけある場合と、二つ以上ある場合がありますが、前者を「直接推理」 (direct inference)、後者を「間接推理」 (indirect inference) といいます。間接推理には三段論法、帰納推理、類比推理などがあります。ここでは間接推理のそれぞれについて簡単に紹介します。

演繹推理(演繹法)

間接推理は、二つ以上の前提から結論を導くものです。また普遍的、一般的原理をもつ前提から特殊な内容の結論を導く推理を演繹推理(演繹法)といいます。演繹推理の代表的なものが、二つの前提から結論を導き出す間接推理としての三段論法です。

三段論法(定言的三段論法)において二つの前提がありますが、初めの前提を大前提といい、次の前提を小前提といいます。そして大前提には大概念(P)と中概念(M)が、小前提には小概念(S)と中概念(M)が含まれるのであり、結論には小概念(S)と大概念(P)が含まれるようになります。ここで中概念(M)を媒概念ともいいます。例えば次のようになります。

大前提:すべての人間(M)は死すべきものである(P)。

小前提:すべての英雄(S)は人間(M)である。

結論:すべての英雄(S)は死すべきものである(P)。

これを符号だけで表示すれば次のようになります。

MはPである。

SはMである。

ゆえに、SはPである。

この三段論法において大概念(P)の外延が最も大きく、中概念(M)がその次に大きく、小概念(S)の外延が最も狭いのです。

帰納推理(帰納法)

間接推理において、二つ以上の前提が特殊な事実を包含する場合、その特殊な内容からより普遍的な真理を結論として導こうとする推理方法を「帰納推理」(inductive inference)または帰納法といいます。例を挙げれば、次のようになります。

馬、犬、鶏、牛は死ぬものである。

馬、犬、鶏、牛は動物である。

ゆえに、すべての動物は死ぬものである。

ところでこの帰納推理の結論(「ゆえにすべての動物は死ぬ」)は、判断形式から見ると正しいのでしょうか。この結論は「全称肯定判断」です。したがって、動物の概念は周延しなければなりません。ところがこの帰納法では不周延です。馬、犬、鶏、牛だけでは動物の一部だからです。全称肯定判断でなければならないにもかかわらず、特殊肯定判断からなっています。

つまり判断形式から見れば、この間接推理は誤っています。しかし、自然界には少数の観察から全体の性質を認識可能ならしめる「斉一性の原理」が働いています。また、自然界に働いている「因果律」が、同一原因から同一結果の想定を可能ならしめています。したがって、帰納推理は大体において正当であることが体験によって証明されているのです。

類比推理

推理において、また一つ重要なのが類比推理です。今ここに、AとBという二つの観察の対象があるとします。そして観察によって、AとBが共に共通な性質、例えばa、b、c、dの性質をもつことが分かっており、Aには、Bにない、もう一つの性質eがあることが分かったとします。そしてそれ以上詳しく観察しにくい条件下にあるとします。そのとき観察者は、A、Bがa、b、c、dの性質を共通にもっているという事実を根拠として、Aがもっているeの性質を、Bも持っているであろう推理できます。このような推理を「類比推理」または簡単に「類推」といいます。

例を挙げれば、地球と太陽を比較して火星にも地球と同じような生物がいるだろうと推理することがそれなのです。例えば、両者が次のような共通の性質をもっているとします。

a:両者共に惑星であり、自転しながら太陽の周りを公転している。

b:大気をもっている。

c:ほとんど同じような気温をもっている。

d:四季の変化があり、水もある。

そうすると、これらの事実を根拠として、地球には生物がいるから火星にも生物がいるであろうと推理することができるのです。これが類推なのです。

ところでこの類推は、私たちの日常生活において、しばしば使われているのです。今日の発達した科学的知識も、初期には、この類推によって得られたものが多かったのです。そればかりでなく、日常の家庭生活、団体生活、学校生活、企業生活、創作活動などにおいて、類推は重要な役割を果たしています。したがって、ここに類推の正確性が必要になってきます。その正確性の必要条件は、次のようになります。

①比較される事物に類似点があるべく多くあること。

②その類似点は偶然的ではなく、本質的であること。

③両者の類似点に対して両立しえない性質があってはならない。

以上で、類推に関する説明を終えられています。形式論理学には、このほかにも、直接推理、仮言的三段論法、選

言的三段論法、誤謬論など扱うべき項目がまだありますが、ここでは、ただ形式論理学の要点だけを紹介するのが目的であるため、この程度で終えることにするということでした。

(二) ヘーゲル論理学

ヘーゲル論理学の特徴

ヘーゲル論理学の特徴は、「思考の法則と形式」に関する理論ではなく「思考の発展の法則と形式」に関する理論であるという点にあります。しかもその思考は、人間の思考ではなく、神様の思考です。したがってヘーゲル論理学は、「神様の思考がいかなる法則や形式によって発展したのか」を研究する学問なのです。

この神様の思考は、神様自体に関する思考から、一定の法則に従って自然に関する思考に発展し、ついで歴史に関する思考、国家に関する思考に発展し、ついに芸術、宗教、哲学に関する思考にまで発展します。このような思考の発展に関する法則と形式が、まさにヘーゲル論理学の特徴なのです。

ヘーゲル自ら述べているように、ヘーゲル論理学は世界創造以前の神様の思考の展開を取り扱っており、「天上の論理」すなわち「創造以前の永遠な本質の中にある叙述」なのです。しかし、それは形式論理学のように、単に形式的な思考の法則を取り扱うものではありません。神様の思考の展開であるとしながらも、現実的なものの最も普遍的な諸規定、諸法則を取り扱おうとするものなのです。

ヘーゲル論理学の骨格

ヘーゲル論理学は「有論」、「本質論」、「概念論」の三部門から成っており、この三部門はまたおのおの細分化されています。すなわち、「有論」は「質」、「量」、「質量」から成り、「本質論」は「本質」、「現象」、「現実性」から成り、「概念論」は「主観的概念」、「客観的概念」、「理念」から成っています。そして、これらはまたおのおの細分化されています。例えば「有論」の「質」は「有」、「定有」、「向自有」から成り、さらに「有」は「有」、「無」、「成」から成っているのです。

ヘーゲル論理学において論理展開の出発点となっているのが有―無―成の弁証法です。この三段階を通過して「有」が「定有」に移行します。そして「定有」にまた三段階があつて、それを通過すれば「定有」は「向自有」に移行します。「向自有」にまた三段階があつて、これを通過すると「質」が「量」へ移ります。「量」が三段階を通過して「質量」に移り、「質量」が再び三段階を通過すれば、「有」に関する理論が終わります。

次は、「本質」に関する理論ですが、「本質」から「現象」へ、「現象」から「現実性」へと移行します。次は「概念」に関する理論です。概念は「主観的概念」から「客観的概念」へ、「客観的概念」から「理念」へと移行します。「理念」の中では、「生命」、「認識」、「絶対理念」という三つの段階があります。そのようにして、「絶対理念」が論理の発展における最後の到達点となっているのです。

次に、論理の世界すなわち理念の世界は、真に自己を実現するために、かえって自己を否定して自然の領域に移行します。ヘーゲルはこれを「理念自身の他なるものへ移りゆく」といい、自然は「理念の自己疎外、自己否定」(Selbstentfremdung, Selbstverneinung der Idee)、または他在の形式(die Form des Andersseins)における理念であるといえます。自然界においては、「力学」、「物理学」、「生物学」の三段階を通過します。

このように自己を否定して自らの外に現れ自然界となった理念は、その否定をさらに否定して本来の自己に戻るといえます。人間を通じて自己を回復した理念が精神です。精神は「主観的精神」、「客観的精神」、「絶対精神」の三段階を通過しますが、ここに「絶対精神」が精神の発展の最後の段階なのです。そこにおいて「絶対精神」は「芸術」、「宗教」、「哲学」の三段階を通過してついに本来の自己(絶対理念)を復帰するのです。

有―無―成の弁証法

ヘーゲル論理学においては、有から出発して絶対理念に至るまでを扱っていますが、有は有論において扱われており、有―無―成の弁証法から始まっています。したがってヘーゲル論理学の性格を理解するためには、有―無―成の弁証法について調べてみる必要があります。この部分がヘーゲル論理学(弁証法)の出発点であると同時に核心となっているからです。

ヘーゲルの論理学は有から始まります。有とは、単に「ある」ということですが、それは最も抽象的な概念であり、全く無規定性な空虚な思考です。ゆえにそれは否定的なもの、すなわち「無」であるといえます。ヘーゲルにおいては、有と無は共に空虚な概念であり、両者にはほとんど区別がありません。

次にヘーゲルは、有と無の統一が成であるといえます。そこにおいて、有も無も、共に空虚で抽象的なのですが、両者は対立の状態において統一をなしたのちに、最初の具体的な思考としての成となります。この有―無―成の論理を基本として、普通ヘーゲルの方法と考えられている、正―反―合、肯定―否定―否定の否定、定立―反定立―総合の弁証法的論理が成立しているのです。

定有への移行

次は、「定有」について述べられています。定有とは、一定の状態をもつ有、具体的に考察された有であり、有が単に「ある」を意味しているのに対して、定有は「何ものかである」ことを意味しています。有―無―成から定有への移行は、要するに抽象的なものから具体的なものへの移行を意味しているのです。成はそのうちに有と無の矛盾を含んでいますが、この矛盾によって、成は自己を止揚して、つまり一層高められて、定有となるのです。

このように定有とは、特定の有、規定された有なのです。ヘーゲルはこの定有の規定性のことを「質」と呼びました。しかしいくら特定されるといっても、ここで考察されているのは、単純な規定性のことであり、規定性一般にすぎません。有を定有とする規定性は、一方では「成るものである」という肯定的な内容であると同時に、他方では限られたもの、すなわち制限を意味しています。したがって、あるものをあるものとする質は「成るものである」という肯定的な面から見れば、実在性であり、限られたもの、他のものでないという面から見れば、否定性です。したがって定有においては、実在性と否定性の統一、肯定と否定の統一がなされているのです。次に定有は向自有へと移行します。向自有とは、他のものと関連せず、また他のものへ変化せず、どこまでも自分自身にとどまっている有のことです。

有—本質—概念

ヘーゲルが「有論」において論じたのは、「あるということ」はどういうことかということから始まって、変化の論理、生成消滅の論理に関することでした。次に「有論」は「本質論」へと移りますが、そこでは、事物のうちにある不変なもの（本質）、および事物の相互関連性が論じられています。次に「有論」と「本質論」の統一としての「概念論」へと移行します。そこでは、他者に変化しながら自己であることをやめない事物のあり方、すなわち自己発展が考察されています。この発展の原動力をなすものが、概念であり、生命なのです。

なぜ神様の思考が有—本質—概念というように進んだといえるのでしょうか。それは、事物を外側から内側へと関心を移していく人間の認識の過程を見れば分かるということです。例えば、ある花を認識する場合、まず外的に現象的に花の存在をとらえたのちに花の内的な本質を理解するというのです。そして、花の存在と花の本質が一つになった花の概念を得るようになるというのです。

論理—自然—精神

すでに述べられているように、ヘーゲルによれば、自然とは他在の形式における理念、自己疎外した理念です。したがって論理学を「正」とすれば、自然哲学は「反」となります。次に、理念は人間を通じて再び意識と自由を回復しますが、それがすなわち精神です。したがって、精神哲学は「合」となります。

自然界も、正—反—合の弁証法的発展をしていますが、それが力学、物理学、生物学の三段階です。しかし、それは自然界そのものが発展する過程ではなくて、自然界の背後にある理念が現れていく過程なのです。まず力の概念が、次に物理的現象の概念が、その次に生物の概念が現れるというのです。

そしてついに人間が現れ、人間を通じて精神が発展します。それがすなわち主観的精神、客観的精神、絶対精神の三段階の発展です。主観的精神とは、人間個人の精神のことですが、客観的精神とは個体を越えて社会化された精神、対象化された精神をいいます。

客観的精神には、法、道徳、倫理の三段階があります。法とは、国家における憲法のように整備されたものではなく、集団としての人間関係における初歩的な形式をいいます。次に、人間は他人の権利を尊重して、道徳的生活をするようになります。しかしそこには、まだ多分に主観的な面（個人的な面）があります。そこで、すべての人が共通に守るべき規範として倫理が現れます。

倫理の第一段階は、家庭です。家庭では愛によって家族が互いに結ばれており、自由が生かされています。第二段の段階は、市民社会です。ところが市民社会に至ると、個人の利害が互いに対立し、自由は拘束されるようになります。そこで第三の段階として、家庭と市民社会を総合する国家が現れるようになるのです。ヘーゲルは、国家を通じて理念が完全に自己を実現すると考えました。理念の実現した国家が理性国家です。そこでは、人間の自由が完全に実現されます。

最後に現れるのが絶対精神ですが、絶対精神は芸術、宗教、哲学の三段階を通じて自らを展開します。そして哲学に至って理念は完全に自己を回復します。このようにして理念は、弁証法的運動を通じて原点に帰るのです。すなわち、自然、人間、国家、芸術、宗教、哲学などの段階を通過して、ついに最初の完全なる絶対理念（神様）に帰るのです。この帰還がなされることによって発展の全過程が終わります。

ヘーゲル論理学のトライアード構造

これまで説明されているように、ヘーゲル弁証法の始まりは有—無—成というトライアード（三段階過程）であり、この三段階は矛盾による正—反—合の三段階です。このようなトライアードがレベルを高めながら反復することによって、論理学—自然哲学—精神哲学という最高のトライアードを形成するのです。

論理学を構成する三段階過程は有—本質—概念ですが、この概念の段階において絶対精神（神様の思考）は理念つまり絶対理念となります。ところで絶対精神は、論理学の段階を通過して、絶対理念となって外部に現れたのち、自然界となり（自然哲学）、さらに人間を通じて主観的精神—客観的精神—絶対精神となります。そして一番最後には、最初に出発した自己自身、すなわち絶対理念に戻ります。

自然哲学や精神哲学は、論理学とは全く別の分野のように考えがちですが、そうではありません。論理学は、三段階過程の初めの段階ですが、その中に自然哲学や精神哲学の原型がすべて含まれているのです。

これまで述べられているように、絶対精神は有—本質—概念というトライアードの概念の段階において理念となりますが、この理念は自然哲学と精神哲学の内容のすべての原型となっているのです。それはいわば、宇宙の設計図をもっている精神です。つまり自然哲学や精神哲学は、この理念の中の原型がそのまま外部に現れた映像にすぎない

のです。あたかも映画のフィルムの画像が、スクリーンに映ったものが映画であるのと同じなのです。言い換えればヘーゲルの論理学は最高のトリアーデの初期段階であり、自然哲学や精神哲学の原型であって、それらをすべて包含しているのです。それゆえ、論理学においてヘーゲルの哲学体系全体を扱っているのです。絶対精神の発展を扱う、このようなヘーゲルの弁証法は普通、観念弁証法と呼ばれています。

ヘーゲル弁証法の円環性と法則と形式

これまでに述べられているように、ヘーゲル弁証法は、正-反-合の三段階の発展の反復を通じて高い水準において元位置に戻ってくる復帰性の運動であり、円環性の運動です。これは低いレベルのトリアーデにおいても、高いレベルのトリアーデにおいても、同じなのです。ところでヘーゲル弁証法のもう一つの特徴は、発展運動が円環性(復帰性)であると同時に完結性であるということです。絶対精神が自己内復帰を終えれば、それ以上の発展はなくなるからです。

ここで、ヘーゲル論理学における法則と形式について述べられています。形式論理学における法則は、同一律、矛盾律などでありました。そして形式は、判断形式や推理形式でした。ところでヘーゲル論理学の法則は、弁証法の内容である「矛盾の法則」、「量から質への転化の法則」、「否定の否定の法則」などであり、形式は、弁証法の発展形式である正-反-合の三段階過程による発展形式を意味します。このような三段階発展の形式を扱う論理学は普通、弁証法論理学と呼ばれています。

(三) マルクス主義論理学

ヘーゲルによれば、概念が物質の衣を着て現れたのが自然であるので、観念(概念)は客観的存在でした。ところがマルクスは逆に、物質こそ客観的な存在であって、観念(概念)は物質世界が人間の意識に反映したにすぎないと主張したのです。しかしマルクスは、ヘーゲルの正反合の弁証法をそのまま受け入れて、それを物質の発展形式としたのです。したがってヘーゲルの観念弁証法に対して、マルクスの場合は唯物弁証法というのです。

この唯物弁証法に基づいてマルクス主義の論理学が立てられました。ところで唯物弁証法も弁証法、すなわち正反合の三段階過程を内容としている点においては観念弁証法と同一であるために、マルクス主義論理学もやはり弁証法的論理学なのです。その特徴は本来、形式論理学、特に同一律・矛盾律に反対するということなのです。すなわち、事物が発展するためには「AはAであると同時にAは非Aである」でなくてはならず、思考の法則はその反映であると考えたからなのです。そして唯物史観の立場から、思考の形式と法則を扱う形式論理学は上部構造に属し、階級性をもつ論理学であるとして、これを拒否し、唯物弁証法による弁証法的論理学を立てたのです。

ところが形式論理学を拒否することによって、必然的に次のような困難にぶつかるようになったのです。すなわち、形式論理学におけるような前後に矛盾のない、終始一貫した正確な思考をすることができなくなってしまうという困難に陥らざるをえなかったのです。

言語学も同様な困難に陥っていました。言語も上部構造に属し、階級性をもつという主張とともに、共産主義体制下において、それまで常用していたロシア語に代わる新しいソビエト言語を使用する必要性が論じられるようになったのです。

そこで1950年にスターリンが「マルクス主義と言語学の諸問題」という論文を発表し、「言語は上部構造ではなく、階級的なものでもない」と言明したのです。言語学におけるこの問題は論理学における問題でもあったため、この論文を契機として、1950年から51年にかけて、ソ連で形式論理学の評価をめぐって大々的な討論が行われました。その討論によって、形式論理学の思考の形式と法則は上部構造ではなく、階級性をもたないという結論が下されたのです。そして形式論理学と弁証法的論理学との関係に対しては、「形式論理学は、思惟の初等的法則と形式に関する学であるが、弁証法的論理学は、客観的実在とその反映たる思惟との発展法則に関する高等論理学である」と規定されたのでした。

ところで、唯物弁証法に基づいた論理学すなわち弁証法論理学は、ここまで説明したように形式論理学の同一律、矛盾律などを批判しただけで、論理学として体系化された内容は誰によっても提示されていないのです。

(四) 記号論理学

記号論理学は、形式論理学を発展させたものであり、数学的記号を用いて、正しい判断の仕方を正確に研究しようとするものです。形式論理学では、概念の外延の包摂関係、すなわち判断における主概念と賓概念の包摂関係を主題としていました。それに対して記号論理学では概念と概念、命題と命題の結合関係に注目し、数学的記号によって思考の法則や形式を研究することがその主題となりました。

命題の結合の5つの基本形式とされているのは、次のようなものです。(p, qを任意の二つの命題とします)

- ①否定(negation)「pでない」…… $\neg p$
- ②選立(disjunction)「pまたはq」…… $p \vee q$
- ③両立(conjunction)「pとq」…… $p \cdot q$
- ④含立(implication)「pならばq」…… $p \supset q$
- ⑤等立(equivalence)「pはqに等しい」…… $p \equiv q$

この五つの基本結合によって、いかなる複雑な演繹的推理も正確に表現されます。例えば形式論理学の基本的な

原理である同一律、矛盾律、排中律は次のように記号化されます。

同一律…… $p \supset p$ または $p \equiv p$

矛盾律…… $\neg (p \cdot \neg p)$

排中律…… $p \vee \neg p$

哲学はそれぞれ膨大な体系をもっていますが、その論理構成が正しいかどうかが問題です。その正しさを見分けるのに、数学的記号を用いて計算してみればよいというのです。そのような立場からできたのが記号論理学です。

（五）先験的論理学

先験的論理学(超越的論理学)とは、カントの論理学のことをいいます。カントは、客観的な真理性はいかにして得られるのかという問いに対して、直感形式を通じて得られた感性的内容を思惟形式(悟性形式)と結合すること、すなわち思惟することによって得られると考えたのです。

すでに述べられているように、思考には形式があります。形式論理学の判断形式や推理形式がそれであり、ヘーゲル論理学の弁証法の三段階発展の形式も思考の形式なのです。同様にカントにおいても、思考するのに一定の形式があるのです。それが彼の直感形式と悟性形式(思惟形式)なのです。カントの悟性形式には十二の形式がありますが、それは十二の判断形式に基づいて分類したものです。カントは判断の種類を量、質、関係、様相の四つに分け、さらにそれぞれを三つに分けて、十二の判断形式を提示しました。そして、この十二の判断形式に対応する十二の思惟形式すなわちカテゴリー(範疇)を立てました。カテゴリーとは、私たちが考える時に必ず従うようになる根本的な思考の枠組みをいいます。

カントは、直感形式や悟性形式は共に先見的な概念であり、経験によって得られるものではないとしました。そこで、彼の論理学は先験的論理学と呼ばれるのです。ところで認識においては、この先験的形式、特に悟性形式だけでは役に立たないのであり、必ず外部からの感性的内容と結合して、認識の対象を構成することによって初めて認識が成立します。つまり悟性形式は、認識のための形式なのです。カントの悟性形式は概念であり、範疇です。概念とは、内容のない空っぽの器のようなものです。その中に内容が入らないと無意味なのです。例えて言えば、「動物」というとき、「動物」それ自体は内容のない単純な概念であるだけで、実際に客観世界にあるのは「鶏」、「犬」、「馬」、「さめ」などの具体的な個物なのです。

ところで、カントにおいては、鶏、犬などのそれ自体(物自体)は実際は不可知です。実際は鶏や犬などの物自体が多様な刺激を発生し、それでもって人間の感覚器の感性を触発し、物自体の様々な性質に対応する雑多な映像の断片を直感させるのですが、そのとき、直感された映像の断片を感性的内容または感性的性質といいます。この感性的性質と心の中の「動物」という概念が合わさって、初めて鶏や犬となって認識の対象となるのです。

それと同様に、悟性形式それ自体は内部が空になっている枠組みにすぎないのであり、外部からの性質によって満たされるとき、初めて認識の対象が構成されるということ、そしてその構成された対象を認識するというのがカントの主張です。

アリストテレス以来の一般論理学(形式論理学)は、認識の対象とは無関係に、思考の一般的形式を扱ってきましたが、カントの論理学は認識の対象に関する真理を確認する認識論理学でした。

二 統一論理学

(一) 基本的立場

思考の出発点と方向

従来の論理学は思考の法則や形式を扱っていますが、統一論理学は、まず第一に、「思考の出発点」について考えるところから始めます。すなわち「なぜ思考が必要なのか」ということから出発して、それから思考の法則や形式について考えるのです。

人間はなぜ考えるのでしょうか。それは神様が宇宙の創造に先立って、まず考えられたからです。つまり神様は宇宙の創造に先立って、心情を動機として愛を実現しようとする目的を立てて、その目的に一致する内容を心の中に構想されたのです。それが思考であり、ロゴス(言)なのです。

したがって神様に似せて造られた人間も、心情を動機として愛を実現するために、目的を立てて、その目的達成のために考えるが本来の思考のあり方なのです。ここで目的とは、被造物においては被造物目的ですが、そこには全体目的と個体目的があります。全体目的とは、愛でもって家庭、隣人、民族、人類など全体に奉仕して、全体を喜ばせようとすることであり、ひいては神様に奉仕して神様を喜ばせようとすることです。個体目的とは、自己の個人的な欲望を満足させようとすることです。結局、この二つの目的が人間の生きる目的であり、その目的を達成するために人間は考えるのです。全体目的と個体目的において、全体目的が優先されなくてはなりません。したがって人間の思考は、一次的には全体目的を実現するために、二次的には個体目的を実現するためになされなければなりません。個体目的も結局は全体目的のためにあります。すなわち人間は本来、自己の利益を中心として考えるのではなく、他人を愛するために考えるのです。これが本来の思考の出発点であり、方向なのです。

思考の基準

何が思考の基準になるのでしょうか。存在論においても認識論においてもそうですが、統一論理学はどの部門にお

いても、論理展開の根拠を原相においています。ですので思考の基準も原相にあるのであり、それは原相の論理的構造なのです。すなわちロゴス(構想)が新生される時に形成される、内的發展的四位基台なのです。それは、心情を基盤とした創造目的を中心として、内的性相と内的形状の間に行われる円満で調和のある授受作用のことをいいます。

関連分野

統一論理学の本論に入る前に、もう一つ述べておきたいのは論理学の関連分野です。形式論理学は、他の分野との関連を扱っていません。そのため、その代案として弁証法的論理学や認識論理学が出現したのです。統一論理学における思考の出発点は神様の愛に基づいた創造目的の実現にあり、その基準は原相の論理構造にあるので、関連分野は大変広いのです。なぜならば、思考の起源は神様のみ言(ロゴス)つまり構想なのですが、構想なしに営まれる文化分野は何一つないからです。

原相において、ロゴスが形成される内的發展的四位基台は、すべての万物が創造される「創造の二段構造」の一部です。したがってロゴスはみ言であると同時に、宇宙の法則として万物すべてを網羅しているのです。同様にロゴス(思考)の学問としての論理学も、すべての他の領域と密接に関連しています。内的發展的四位基台は、外的發展的四位基台とともに創造の二段構造の一部だからです。

創造の二段構造における内的四位基台は論理構造となり、外的四位基台は認識構造や主管構造となります。認識構造とは、万物から認識を得る場合の四位基台として、主として科学(自然科学)研究の場合に造成される四位基台であり、主管構造は生産や実践、つまり産業、政治、経済、教育、芸術などの場合に造成される四位基台です。したがって論理構造を基礎とする論理学は、認識構造や主管構造を基礎とする、すべての文化領域と密接に関連しているのです。

原相の構造

ここで、原相の構造についてさらに説明されています。これまで述べられてきたように、原相の構造は内外二段の四位基台から成っています。それを「原相の二段構造」といいます。それに似た被造物の二段構造を「存在の二段構造」といいます。ところで原相構造における内外の四位基台は、心情中心の自同性と目的中心の発展性をそれぞれもつようになり、自同的および發展的四位基台となります。その際、内外の四位基台が共に發展的となる場合の原相構造を「創造の二段構造」といいます。

被造物は例外なく、すべてこの二種類の二段構造に似せて造られたので、各個性真理体はみな「存在の二段構造」と「創造の二段構造」をもっています。ですので人間において、論理構造、認識構造、存在構造、主管構造などはみな、それぞれ二段構造なのです。したがって、日常生活において人間が関連しているすべての四位基台は必ず二段の四位基台、つまり二段構造なのです。

これはまた、内的四位基台の形成に重点を置く領域と、外的四位基台形成に重点を置く領域は互いに補完関係にあることを意味します。例えば内的構造に重点を置く論理学や、外的構造に重点を置きながら主管活動の一分野を扱う教育論などは、相互補完関係にあるのです。要約すれば、人間社会のすべての二段構造は原相の二段構造に由来するのであり、すべて相互関係があるということです。

(二) 原相の論理的構造

以上で、統一論理学の序論に相当する「基本的立場」の説明を終えられています。次に統一論理学の本論に入ります。

ロゴス形成の構造と内的發展的四位基台

これまでに述べられているように、論理学は思考の法則と形式に関する学問です。ところで統一論理学の根拠は、原相の本性相内の内的四位基台、特に内的發展的四位基台にあります。したがって論理学が思考を取り扱う学問である以上、この内的發展的四位基台において、いかにして思考が発生するかを調べてみなければなりません。

原相論において述べられているように、本性相内の内的發展的四位基台の内的性相は、知、情、意であり、内的形状は観念、概念、原則、数理です。内的發展的四位基台において、目的を中心として授受作用が行われますが、目的は心情(愛)を基盤として立てられます。すなわち心情(愛)の目的を実現するために授受作用が行われ、ロゴスつまり構想が形成されます。ゆえに構想は、あくまでも愛の目的を実現するための構想なのです。それが論理構造です。そのように「心情(愛)の目的を実現する内的授受作用によってロゴスを形成する内的四位基台」が、まさに論理構造であるのです。

人間も原相のこのような論理構造に倣って、愛の目的を実現するための内的四位基台を造らなければなりません。そうすれば、そこから愛を指向する思考が生まれるようになるのです。

本来の人間の姿

本来、人間の思考においては、動機が心情または愛でなければなりません。すなわち、人間の思考は愛の実践のためのものなのです。人間に自由が与えられているのも愛の実践のためなのです。自由をもって悪を行ったり、人を憎むのは自由の濫用なのです。愛の実現とは、要するの愛の世界の実現であり、創造理想の世界の実現です。そし

て多くの人が愛を目指して思考すればするほど、愛の世界はより早く実現するのです。

創造の二段構造

創造の二段構造については、これまで何度も述べられてきていますが、ここではそれと論理学の関係について述べられています。創造の二段構造とは、内的発展的四位基台と外的発展的四位基台が連続的に形成されることを意味します。そのとき、内的発展的四位基台からロゴスが形成されるのですが、その内的発展的四位基台がまさに論理構造なのです。

それでは、外的発展的四位基台は論理学とはいかなる関係にあるのでしょうか。論理学にとって外的発展的四位基台は果たして必要なものなのでしょうか。それは必ず必要なものなのです。なぜならば統一論理学において、思考は創造目的の実現あるいは愛の実現を指向するものであり、したがって愛の実践を前提とするからなのです。実践するとは、心に思ったことを外部に対して実際に行うことであり、それがまさに外的四位基台の形成を意味するのです。実践の対象は万物であり、人間です。すなわち愛の実践とは、万物を愛し、人間を愛することなのです。そのように「思考する」ということは、そこには必ず動機と目的と方向があるのであり、必ず実践に移され、行動と結びつかなければならないのです。

そのように思考が実践と結びつくということは、神様がそのようになされたからです。すなわち神様は構想され(ロゴスを形成し)、創造を開始されたのです。それで「創造の二段構造」という概念が成立したのです。形式論理学では思考そのもののだけの形式や法則を扱っていますが、統一論理学の立場から見れば、それは間違いではありませんが不十分なのです。よく「知行一致」とか「理論と実践の統一」といわれますが、その根拠が創造の二段構造にあるのです。

(三) 思考過程の二段階と四位基台形成

悟性的段階と理性的段階

認識には、感性的段階、悟性的段階、理性的段階の三段階があります。これは、認識が統一原理のいう三段階完成の法則に対応しているからです。感性的段階は、外部から情報が入る窓口であるので認識の蘇生的段階ですが、長成的な悟性的段階と完成的な理性的段階では、思考が営まれるようになります。そのうち悟性的段階の思考は外部からの情報に影響されますが、理性的段階に至れば、思考は外部と関係なしに自由に営まれるようになります。

カントもやはり、段階の認識について論じています。外界から来た感性的内容を、直感形式を通じて受ける段階が感性的段階であり、さらに思考形式(悟性形式)をもって思惟する段階が悟性的段階であり、悟性的認識を統一あるいは統制していくのが理性的段階なのです。

マルクス主義の場合、思惟形式は外界の存在形式が意識に反映したものです。

大脳生理学の観点から見れば、「認識論」において説明されているように、感性的段階の認識は感覚中枢で、悟性的段階の認識は頭頂連合野で、そして理性的段階の認識は前頭葉の連合野で行われると考えられています。

悟性的段階と理性的段階において、原相の構造と似た論理構造が形成されます。悟性的段階において、思考は外界から入ってくる感性的要素(内容)によって規定されています。すなわち、外界の内容と内界の原型が照合されて、認識がひとまず完成します。そのとき認識構造あるいは論理構造として、内的な完結的(自同的)四位基台が形成されます。ところが理性的段階では、悟性的段階で得た知識に基づいて、自由に推理を推し進め、新しい構想(新生体)を立てたりします。その時の思考の構造は内的な発展的四位基台です。

認識における大脳の生理過程を来客を迎える過程に比喻することができます。客が入ってくる玄関は、感覚中枢(感性)に相当し、主人と会う応接室は頭頂連合野(悟性)に相当し、居間や書斎は前頭連合野(理性)に相当します。お手伝いから、玄関に客が来たことを伝えられると、主人は応接室に来て客に会って対話をします。主人は客と対話しながら、彼の言うことを理解しようとします。そのとき主人は自分勝手な考えをすることはできません。客との対話に必要な話をしなくてはならないので、自分の考えは相手の言葉によって左右されるのです。これは悟性的段階において行われる認識のたとえです。対話が終わると主人は客と別れて、自分の居間や書斎で、客の話を参考にしながら、自由に考えることができます。これが理性的段階なのです。

理性的段階における思考の発展

理性的段階において、思考はいかに発展していくのでしょうか。思考とは、内的性相と内的形状の授受作用です。そこでまず内的性相と内的形状の授受作用によって、第一段階のロゴス、すなわち思考の結論としての構想(新生体)が形成されます。それで思考が終わる場合もありますが、たいていの場合、その思考の結論(構想)のいかんによっては、次の段階のロゴス(構想)が必要となります。そのとき第一段階で形成されたロゴスは、思考の素材である一つ概念または観念となって、内的形状の中に蓄えられて、第二段階の思考の時に、他の多くの素材(観念、概念)と共に動員されます。このようにして第二段階のロゴスができると、それはまた必要に応じて内的形状の移されて、次の思考の時に、動員されます。そうして、第三段階のロゴスが形成されます。同じ方法で、第四、第五の段階へと思考が続けられるのです。そのように、たとえ一つの事項に関する思考であっても、一回限りで終わらないで、継続される場合が多いのです。これが理性的段階における四位基台形成の過程であり、これを思考の螺旋形の発展といいます。

このように理性的段階において思考が無限に発展を続けていくのは、それが発展的四位基台であるからです。しかしいくら発展を続けるとしても、それぞれの段階で思考がいったん終わった後に新しい思考がなされるので、思考の発

展は完結的な四位基台形成の連続なのです。したがって思考は完結的段階を繰り返しながら発展していくのです。

思考の基本形式

悟性的段階における思考(あるいは認識)は、目的を中心として感性的内容と原型が授受作用することによってなされます。そこでまず、目的が正しく立てられなければなりません。正しい目的とは、これまでで述べられているように、心情(愛)を基盤とした創造目的のことをいいます。

認識論で述べられているように、細胞や組織の原意識において形成される原映像と形式像が、末梢神経を通じて下位中枢の潜在意識に至って、統合されて、そこにとどまるようになります。これが人間が先天的に持っている原型(先天的原型)です。その中で形式像が、認識あるいは思考において、一定の規定を与えるところの思惟形式(思考形式)となるのです。

次に下位中枢の潜在意識が一定の形式(形式像)をもっていることを説明されています。例えば盲腸炎が起きた場合を考えてみます。原意識を統合している下位中枢では、盲腸に固有な性相と形状(機能と構造)に関する情報が絶えず伝えられています。したがって盲腸炎にかかったならば、下位中枢はすぐにその異常が分かるようになります。そして盲腸が本来の状態に戻るように、適切な指示を送るのです。

胃の運動は、強すぎれば胃けいれんになることがあり、弱すぎれば胃下垂になることがあります。そのような胃の運動の強弱に関する情報を下位中枢は知っています。そして胃の運動が強すぎたり弱すぎたりすると、適当にこれを調節します。下位中枢の潜在意識がもっているこのような情報は、陽性、陰性に関するものです。

細胞は核と細胞質からなっていますが、核が細胞質をコントロールしています。核と細胞質は、主体と対象の関係にあります。下位中枢の潜在意識は、そのような細胞における主体と対象の情報をもっています。

潜在意識はまた、時間と空間の感覚をもっています。それで体内のどこかで、またある時に炎症があれば、すぐそこに白血球を送って炎症を治そうとするのです。

有限と無限の関係についても潜在意識は知っています。例えば赤血球がある一定の期間、生命を維持しているのですが、やがて破壊されて新しい赤血球が生成されます。そのように、体内では絶えず新しい細胞が生まれ、古い細胞が減んでゆくのですが、潜在意識はそのような有限性を知っています。また体内では、持続性、永遠性、循環性を保ちながら機能している細胞や器官もあります。潜在意識は、そのような細胞や器官の機能の無限性を知っているのです。

このようにして下位中枢の潜在意識は、性相と形状、陽性と陰性、主体と対象、時間と空間、有限と無限などの形式を知っているのです。潜在意識に映っているこれらの相対的関係の像が形式像ですが、その形式像が結局、皮質中枢に送られて思考における思惟形式となるのです。

思惟形式が思考において果たす役割をサッカーの試合に例えて説明されています。サッカーの試合において、選手たちは、それぞれ思い思いに走ったり蹴ったりしますが、一定のルールに従いながらそうしているのです。同様に、理性は自由に思考を進めるのですが、形式像に影響されて、思考は一定の形式をとりながら、つまり規則を守りながらなされるのです。

思惟形式は、範疇です。範疇とは、最高の類概念または最も重要な類概念をいうのであり、統一思想においては、四位基台および授受作用の原理を基盤として範疇が立てられています。四位基台と授受作用が統一思想の核心だからです。そこでまず、十個の基本的な範疇が立てられますが、それぞれの範疇の意味については「認識論」において説明されています。今日まで、多くの思想家がいろいろな範疇を立てましたが、そのうちには、統一思想の範疇に関連するものも少なくありません。例えば「本質と現象」という範疇は、統一思想の「性相と形状」に相当するものです。

それでは、統一思想の範疇を第一範疇と第二範疇に分けることにします。第一範疇は、統一思想に特有な十個の基本的な形式です。第二範疇は、第一範疇を基礎として展開したものであって、そこには従来の哲学における範疇に相当するものも含まれます。第一範疇と第二範疇を列举すれば、次のようになります。第二範疇の数には特に制限はなく、ここではその一部だけを挙げるにとどめています。

第一範疇

①存在と力、②性相と形状、③陽性と陰性、④主体と対象、⑤位置と定着、⑥不変と変化、⑦作用と結果、⑧時間と空間、⑨数と原則、⑩有限と無限

第二範疇

①質と量、②内容と形式、③本質と現象、④原因と結果、⑤全体と個体、⑥抽象と具体、⑦実体と属性……

第一範疇の「性相と形状」は、第二範疇の「本質と現象」や「内容と形式」と似ているにもかかわらず、なぜこのような目新しく、一般的でない用語を使うのでしょうか。

統一思想の基本になっているのは、四位基台、正分合作用、授受作用などの概念です。これらを取り去れば、統一思想は骨格が抜けてしまったのと同然なのです。したがって統一思想の範疇としては、これらと関係した概念を用いざるをえないのです。範疇と思想は密接な関係をもっているのです。範疇を見れば思想が分かり、思想を見れば範疇が分かるほどです。範疇は思想の看板です。統一思想は新しい思想であるので、それにふさわしい新しい用語の範疇が当然立てられなければならないのです。

マルクスの思想にはマルクス的な範疇があり、カントの思想にはカント的な範疇があり、ヘーゲルの思想にはヘーゲル的な範疇があります。同様に、統一思想の範疇も統一思想の特徴を示すものでなくてはならないのであり、それが

第一範疇としての十個の基本的な形式なのです。

思考の基本法則

形式論理学において、思考の根本原理は同一律、矛盾律、排中律、充足理由律でした。しかし統一思想から見た場合には、それよりもっと基本的な法則があります。それが授受法です。この授受法は論理学の法則であるだけでなく、すべての領域の法則なのです。政治、経済、社会、科学、歴史、芸術、宗教、教育、倫理、道徳、言論、法律、スポーツ、企業、そしてすべての自然科学(物理学、化学、生理学、天文学等)など、実にあらゆる領域を支配する法則なのです。

そればかりでなく、全被造世界、すなわち全地上世界(宇宙)全霊界を支配してきた法則なのです。そして、論理学と直接関係のある認識論の法則でもあるのはいうまでもありません。なぜ授受法がこんなに広範囲に作用しているのかといえば、それが神様の創造の法則であるからなのです。そしてその根拠は、神様の属性(本性相と本形状)の間に作用した授受作用にあるのです。そのような神様の属性の間の授受作用に似せて、神様は万物を創造されたのであるので、被造物においてはそれが法則となっているのです。

このことは、授受法が他のすべての法則までも支配する最も基本的な法則であることを意味します。物理的法則や化学的法則や天文学的法則も、その基礎となっているのは授受法なのです。したがって形式論理学をはじめとする論理学の法則や形式も、実はその根拠が授受法にあったのです。それゆえ授受法は、思考の基本法則なのです。ここに、その例として、三段論法と授受法を比較してみます。

三段論法と授受法

三段論法は、形式論理学の中の一つの推理形式です。授受法が形式論理学の形式や法則の根拠となっているということを、この次のような三段論法の例から説明します。

人は死ぬ
ソクラテスは人である
ゆえにソクラテスは死ぬ

ここで大前提と小前提から導かれた結論は、目的を中心とした大前提と小前提との授受作用(対比)の結果得られたもののなのです。そこにおいて、「人は死ぬ」と「ソクラテスは人である」という二つの命題が対比されて結論が得られているのです。さらに命題自体も二つの概念(主語と述語)の対比によって成立しているのです。

メートルとフィートを比べる次のような例も同様です。

- a 1メートルは3. 28フィートである
- b この机の横の長さは2メートルである
- c ゆえに、この机の横の長さは6. 56フィートである

この場合は、結論cは、a命題とb命題を対比(授受作用)して得られたものです。

同一律と授受法

同一律の場合も同様です。例えば「この花はバラである」という命題を考えてみます。これは「この花」と「バラ」を心の中で比較して、それらが一致したので「……である」と判断したのです。比較するということは、対比型の授受作用を意味します。したがって、同一律も授受法に基づいていることが分かります。矛盾律の場合も同様です。そのようにして、形式論理学の法則や形式は、みな授受法の基盤の上に立てられているのです。

思考と自由

論理学は思考の形式や法則を強調しているので、「自分が考えることまで、いちいち法則や形式の干渉を受けなければならないのか」とか、「いかなる干渉も受けずに自由に考えたい」という思いがするかもしれません。ところが思考に規則や形式があるのは、実は思考に自由を与えるためなのです。

法則や形式のない思考は一步も進むことができません。それは、あたかも鉄道がなければ汽車は少しも前進できないのと同様です。私たちは、体も心も法則に従って生きるとき、初めて正常に機能することができるのです。

私たちの体を見ると、すべての生理作用は法則の支配を受けています。呼吸も、消化作用も、血液循環も、神経の伝達作用も、みな一定の生理の法則のもとに営まれています。万一、これらの生理作用が法則は離れれば、すぐに病気になるでしょう。人間の思考作用においても同様です。したがって「AはAである」という同一律において、「……である」という論理語を使わないで、例えば「この花はバラである」と言わずに、「この花、バラの花」と言ったら、それは何の意味も分からないのです。形式の場合も同じです。「全称肯定判断」という形式判断(すべてのSはPである)において、「すべての人間は動物である」という判断を例に挙げてみます。この場合も「すべてのSはPである」という形式を取り除けば、ただ「人間、動物」だけが残り、やはり何の意味も全く分からないのです。他人が分からないのはもちろん、時間が経てば自分も分からなくなるでしょう。

そのように、思考には必ず一定の法則や形式が必要なのです。それでは、純粹に自由な思考というものはありませんでしょうか。つまり、法則や形式を離れた自由はありえるのでしょうか。そうではないのです。思考に自由はありますが、それは「思考の選択の自由」なのです。法則や形式に従いながらも、つまり、法則や形式から離れなくても、選択の自由があるのです。

例えば愛の実現に関する思考を例に取れば、愛の実現という共通目的、共通方向を指向しながらも、その具体的な実現においては、個人によってそれぞれの目的や方向は異なるのです。それは選択の自由のためです。つまり選択の自由によって、各自がそれぞれの目的や方向を自由に決定するのです。

それでは、自由な思考がいかに行われるのでしょうか。それは思考(内的授受作用)において、靈的統覚が内的形状内の観念、概念の複合や連合を自由に行うということであり、それはまさに構想の自由なのです。この構想の自由は、理性の自由性に基因するものです。

三 統一論理学から見た従来の論理学

形式論理学

形式論理学そのものに対しては、統一論理学は何も反対することはありません。すなわち、形式論理学の扱っている思考の法則や形式に関する理論はそのまま認めているのです。しかし、人間の思考には、形式の側面だけではなく内容の側面もあります。また思考には、理由や目的や方向性があり、ほかの分野との関連性もあります。すなわち思考は、思考のための思考ではなく、認識や実践(主管)のための思考であり、創造目的実現のための思考なのです。つまり、思考の法則や形式は思考が成立し、維持されるために必要な条件にすぎないのです。

ヘーゲル論理学

ヘーゲル論理学は、神様がいかにして宇宙を創造されたのかを哲学的に説明しようとしたものです。ヘーゲルは神様をロゴスまたは概念として理解し、概念が宇宙創造の出発点であると考えたのです。

ヘーゲルはまず、概念の世界における「有—無—成」の展開について説明しました。有はそのままでは発展がないので、有に対するものとして無を考えました。そして有と無の対立の統一として成が生じるとしたのです。しかし、そこには問題があります。ヘーゲルにおいて本来、無は有の解釈つまり有の意味にすぎないのであって、有と無が分かれているわけではありません。ところがヘーゲルは、有と無を分けてしまい、あたかも有と無が対立しているかのように説明したのです。したがってヘーゲル哲学は、出発点からすでに誤謬があったのです。

次に問題になるのは、概念が自己発展するという点です。統一思想から見れば、原相の構造において、概念は内的形状に属するのであり、目的を中心として、内的性相である知情意の機能—特に知の機能の中の理性—が内的形状に作用することによって、ロゴス(構想)が形成され、それが新しい概念になるのです。したがってロゴスや概念は、神様の心の中に授受作用によって形成されるもの(新生体)であって、それ自体が自己発展するということはありません。チュービンゲン大学総長リュームリンは、ヘーゲルの主張する「概念の自己発展」を批判して次のように述べています。

ヘーゲルのいわゆる思弁的方法なるものが、その創始者ヘーゲルにとって、一体どんな意味をもっていたのかということを理解するために……われわれがどんなに骨を折り頭を悩ましたかは言語に絶する。人々はみな他を顧みて頭をふりながら、こう尋ねたものである。一体君には分かるかね。君が何もしないのに概念は君の頭の中でひとりで動くかね、と。そうだと答えられるような人は、思弁的な頭脳の持ち主だと言われた。こういう人とは別なわれわれは、有限な悟性的カテゴリーにおける思考の段階に立っているにすぎなかった。……われわれは、なぜこの方法を十分に理解しなかったかという理由を、われわれ自身の天分の愚かさに求めて、あえてこの方法そのものの不明晰や欠陥にあると考えるだけの勇気がなかったのである。

またヘーゲルの弁証法からは、次のような問題が生じます。ヘーゲルは、自然を理念の自己疎外または他在形式であると見ました。これは原相論で指摘したように、汎神論—自然を神様そのものの現われと見て、両者に区別をおかない見方—に通じる考え方でした。それは、容易に唯物論に転化する素地となったのです。

ヘーゲルの弁証法において、自然は人間が発生するまでの中間的過程にすぎなかったのです。建物が出来上がる、途中で組み立てられていた足場は取り去られます。それと同じように、人間が発生してから自然は、それ自体としては哲学的には無意味なものとなったのです。

彼はまた、歴史の発展において、人間は理性の詭計に操られているとしましたが、そのために人間は、あたかも絶対精神によって操られる人形のような存在となってしまいました。しかし統一思想から見れば、神様が一方的に歴史を動かしているわけではありません。人間の責任分担と神様の責任分担が合わさって歴史はつくられたのです。

さらにヘーゲルの正反合の弁証法は円環性であり、帰還性であるので、最終的には完結点に達するようになります。したがってヘーゲルにおいて、プロシアは歴史の終わりに完結点として現れる理性国家とならなければなりません。しかし、実際は、プロシアは理性国家になれず歴史の中に消えてゆきました。したがって、プロシアの終わりとともに、ヘーゲル哲学も終わりを告げたということになります。

以上のように、ヘーゲル哲学は多くの問題点を抱えていましたが、そのような誤りを生じた原因は、彼の論理学にあったと見ざるをえません。そのことを次に検討されています。

ヘーゲルは、概念の発展を正反合の弁証的发展としてとらえました。概念(理念)は自己を疎外して自然となり、その後、人間を通じて精神となり、本来の自身を回復するというのです。ハンス・ライゼガングによれば、このようなヘーゲルの思考方式は彼の聖書研究に基づいた特有の方式であるといえます。すなわち、高い総合のうちに止揚されるヘーゲルの対立の哲学は、「一粒の種が地に落ちて死ななければそれはただ一粒のままである。しかし、もし死んだら豊かに実を結ぶようになる」、「私はよみがえりであり命である。わたしを信じる者は、たとえ死んでも生きる」というヨハネ福音書をテーマにしたものだと思います。

そのような立場からヘーゲルは、神様をロゴスまたは概念としてとらえ、そしてそのような神様が、あたかも地に蒔かれた種の生命が外部に自己を現すように、自己を外部の世界に疎外したと見たのです。そこにヘーゲルの犯した誤りの根本原因があったのです。

統一思想から見れば、神様は心情(愛)の神様であり、愛を通じて喜ぼうとする情的な衝動によって、創造目的を立て、ロゴスでもって宇宙を創造されたのです。その時のロゴスは神様の心の中に形成された創造の構想であるだけで、神様そのものではありません。しかし、ヘーゲルの概念弁証法において、神様には心情(愛)や創造目的は見当たらないだけでなく、神様は創造の神様ではなくて、発芽して成長する一種の生命体であったのです。

ここで、ヘーゲル論理学と統一論理学の重要な概念を比較してみれば、その意味するところは異なっていますが、互いに相応する関係にあることが分かります。ヘーゲルにおけるロゴスは、統一思想では神様の構想に相当します。ヘーゲルのロゴスの弁証法は、統一思想では原相の授受作用に対応します。そしてヘーゲルの正反合の形式は、統一思想の正分合の形式に対応します。ヘーゲルの帰還的、完結的な弁証法は、統一思想では、自然界においては創造目的を中心とした授受作用による螺旋形的发展運動に相当し、歴史においては再創造と復帰の法則に相当します。ヘーゲルは自然を通じて理念を見いだそうとしましたが、統一思想は万物を通じて象徴的に、原相(神相と神性)を発見するのです。したがってヘーゲルの汎神論的性格は、統一思想においては汎神相論—すべての被造物において神相が現れているという見方—をもって克服することができるのです。

マルクス主義論理学

これまでに述べられているように、旧ソ連の思想界において引き起こされた言語学論争を收拾するために、スターリンは「マルクス主義と言語学の諸問題」という論文を発表し、そこで彼は、言語は上部構造に属するものではなく、階級的なものではないと結論を下したのでした。その結果、形式論理学の矛盾律・同一律は認められるようになったのです。

しかし、形式論理学の同一律・矛盾律は思考の法則であるだけで、客観世界的发展法則ではありませんでした。したがって思考が同一律・矛盾律に従うということは認めるとしても、客観世界に関する限り、发展は矛盾の法則(対立物の統一と闘争の法則)に従うというのです。形式論理学は自然界を扱うのではなく、思考を扱うからだというのです。しかしそうすると、「思考は客観世界の反映である」という唯物弁証法の本来の主張が崩れるというアポリア(aporia)が生じてしまったのです。

そのようにスターリンの論文が発表されたあとは、唯物弁証法において、客観世界の法則(矛盾の法則)と思考の法則(同一律)が相反するようになってしまったのです。それに対して、客観世界においても、思考においても、发展性(変化性)と不変性が統一されていると見るのが、統一思想の主張なのです。

悟性段階の思考(あるいは認識)は、主として自己同一的です。なぜならば、外界から来た感性的内容と内部の原型が照合することによって、認識がいったん完了するからです。ところが理性的段階における思考は、发展的になります。しかしそうであっても思考は、段階的に发展するので、それぞれの段階において完結的な(すなわち自己同一的な)側面もあるのです。したがって統一思想は同一律・矛盾律も当然認める立場です。

ともかく唯物弁証法において、形式論理学すなわち同一律・矛盾律を認めるようになったということは、何を意味するのでしょうか。本来、唯物弁証法の基本的な主張は、事物を不断に変化し、发展するものとしてとらえるということでした。ところが同一律・矛盾律を認めたということは、たとえ思考に関することであるにせよ、不変性を肯定するようになって、唯物弁証法の変質をもたらしたことを意味するのです。これは、弁証法の修正ないしは崩壊を意味するものです。同時に、事物を自己同一性と发展性の統一として把握する統一思想の主張が正しいことを証明するものなのです。

記号論理学

思考の正確さや厳密さを期するということは意義あることであって、記号論理学に反対する理由はなにもありません。しかし、数学的厳密さだけでは、人間の思考を十分にとらえることはできません。

原相において、内的性相と内的形状が授受作用してロゴスが形成されましたが、そのとき内的形状は原則として数理を含んでいるので、授受作用を通じて形成されたロゴスも数理性を帯びています。したがって、ロゴスによって創造された万物には数理性が現れます。ですので科学者たちは、自然を数学的に研究しているのです。

人間の思考は、ロゴスを基準にしたものです。したがって人間の思考にも当然、数理性があるのです。言い換えれば、思考は数理的正確さに従ってなされるのが望ましいのです。ここに、記号論理学が思考を数理的に研究する意義が認められるのです。

しかし、そこには留意しなければならない点があります。それは内的性相と内的形状の授受作用において、心情が中心になっていることです。これはロゴス(言)の形成において、心情が理性や数理より上位にあることを意味しています。したがって、人間は本来、ロゴスの存在(理性的、法則的存在)であるのみならず、より本質的にはパスト的存在(心情的、感情的存在)であるのです。すなわち、思考にたとえ数学的厳密さがなくても、そこに愛あるいは感情がこもっていれば、発言者の意向が十分に相手に伝えられるのです。

例えば、誰かが火事に出会って「火だ！」と叫ぶとき、これは文法的に見れば、「これが火だ」という意味か、「今、火事が起きた」という意味か、分からないのです。しかし、差し迫った場合には、助けを求める訴えの感情がそこにこもっていれば、その言葉に文法的な正確さがなくても、その意味はすぐ分かるのです。

人間は本来、ロゴスとパストの合性体です。ロゴスだけに従うのでは、人間としては半面の価値しかありません。理性的だけでは人間性が不足しており、情的な側面を共に備えて初めて完全な人間らしさが出るのです。したがって、あまり正確でない言葉の方が、かえって人間らしいという場合もあります。つまり人間の思考には、厳密を要する面もありますが、必ずしも常に正確に、論理的に表現しなくてはならないと主張することはできないのです。

イエス様の言葉を見ても、非論理的な面がたくさん見られます。しかし、その言葉はなぜ偉大なのでしょう。それはその言葉のうちに、神様の愛が含まれているからなのです。したがって、人間の言葉が正確に論理に従っていないくても、その中にパスト的な要素が適切に含まれているとすれば、その意味するところを十分に相手に伝えることができるのです。

先験的論理学

カントは、対象からの感性的内容と人間悟性の先天的な思惟形式が結合して、認識の対象が構成されることによって、初めて認識と思考がなされると主張しました。しかし統一思想から見れば、認識の対象には内容(感性的内容)だけでなく形式(存在形式)もあり、認識主体にも形式(思惟形式)だけではなく内容(内容像)もあるのです。カントのいう先天的な形式と感性的な内容だけでは、対象に対する思考の真理性は保証されないのです。それに対して統一思想では、人間と万物の必然的關係から思考の法則・形式と、客観世界の法則・形式の対応性が導かれ、対象に対する思考の真理性が保証されているのです。